Brief communication
［査読有り］ 短 報

# 新約聖書「ガラテヤ人への手紙」における裏返し構造
## —Blighのキアスムス構造を前提として—

The reversal structure of the Epistle to Galatians in the New Testament
—Based on Bligh's chiastic structure—

大喜多 紀明
やぐら遺跡伝承文化研究会

Noriaki Ohgita
Folklore and Culture Study Group of *Yagura*

キーワード：新約聖書，裏返し構造，キアスムス，異郷訪問譚
Key words：New Testament, Reversal structure, Chiasmus, *Ikyo-Houmon-Tan*

抄録

本稿では，新約聖書に収納された巻であるガラテヤ人への手紙が裏返し構造であるか否かを検証した．その際，当該テキストにおける既知の構造的キアスムスである，Blighが考案した図式を前提に，かかる図式を構成する要素対が対照的な関係であるか否かを確認することによる判別をおこなった．本稿の分析の結果，当該図式を構成するすべての要素対が対照的な関係であることが明らかになったため，テキストは裏返し構造であることがわかった．

## 1．はじめに

大林論文[1]の知見に基づけば，裏返し構造は，異郷訪問譚における構造上の「共通の特徴」である[1]．かかる大林仮説の蓋然性については，加藤[2]，依田[3]，大喜多[4][5]などにより検証されており，一連の検証は，いずれも，大林仮説の蓋然性の高さを支持している．一方，異郷訪問譚とはいえない形式を持つ物語に裏返し構造がみとめられるかについては，大林仮説の射程範囲ではない．異郷訪問譚とはいえない形式の物語に裏返し構造がみとめられるかについては，筆者による，アイヌ口承テキスト[6]および聖書テキスト[7]を対象とした報告がある[2]．

聖書テキストは，旧約聖書と新約聖書から構成されている．さらに，旧約聖書および新約聖書はそれぞれ39巻および27巻により構成されている．聖書を構成する各巻の著者の属性が多様であり，執筆時期や編集過程も多岐にわたる．以上は，一つの巻にみとめられた構造上の特徴が，そのまま聖書テキスト全般にわたる特徴であるとみなすべきではないことを示している．このことは，裏返し構造においても同様である．つまり，聖書の特定の巻に裏返し構造がみとめられることをもって，これを聖書全般の特徴として判断することはできない．

本稿の目的は，聖書テキストに裏返し構造がみとめられる蓋然性を評価するところにある．新約聖書に限定すれば，新約聖書を構成する27巻のうちの12巻が，次頁の先行研究によって検証されてきた．

検証された12巻については，すべての巻が，裏返し構造により構成されていた．一方，残りの15巻については検証がおこなわれていない．

本稿では，現在まで検証がおこなわれていない巻の一つである「ガラテヤ人への手紙」をテキストとし，かかる構造を，裏返し構造の観点から分析することにより，聖書テキストに裏返し構造がみとめられる蓋然性に関する検証をおこなうことにする．

[1]本稿では，これを，大林仮説と呼ぶ．
[2]本稿ではアイヌ口承テキストについての言及はおこなわない．

| 巻[3] | 先行研究 |
|---|---|
| マタイによる福音書 | [9] |
| マルコによる福音書 | |
| ルカによる福音書 | [10] |
| ヨハネによる福音書 | |
| 使徒行伝 | |
| ローマ人への手紙 | [11] |
| コリント人への第一の手紙 | |
| コリント人への第二の手紙 | |
| ガラテヤ人への手紙 | |
| エペソ人への手紙 | |
| ピリピ人への手紙 | |
| コロサイ人への手紙 | |
| テサロニケ人への第一の手紙 | |
| テサロニケ人への第二の手紙 | |
| テモテへの第一の手紙 | |
| テモテへの第二の手紙 | |
| テトスへの手紙 | [12] |
| ピレモンへの手紙 | [13] |
| ヘブル人への手紙 | [12] |
| ヤコブの手紙 | [14] |
| ペテロの第一の手紙 | [15] |
| ペテロの第二の手紙 | |
| ヨハネの第一の手紙 | [16] |
| ヨハネの第二の手紙 | [17] |
| ヨハネの第三の手紙 | [18] |
| ユダの手紙 | [19] |
| ヨハネの黙示録 | |

## ２．異郷訪問譚と裏返し構造

異郷訪問譚とは物語における形式の一種である．通念に基づけば，物語の主人公が，主人公にとっての異郷を訪問する形式の物語をいう．西條論文[20]によれば，異郷訪問譚には，「異郷に入るときは，偶然に行く」[4]，「異郷での体験は，異常体験である」[5]，「異郷から出るときは，自分の意志で出る」[6]，「異郷から出た後，主人公は変化する」[7]という 4 種類の特徴がある．本稿では，かかる特徴①～④と合致する物語を異郷訪問譚とみなすことにする．

1 節で述べたように，裏返し構造は，異郷訪問譚に出現する，構造上の「共通の特徴」として認識されてきた．ここで，かかる裏返し構造とは，キアスムスにおける構造上の下位の概念である．まず，キアスムスとは，そもそも修辞論における用語の一種である．物語やテキストなどの構造を論じる際に，かかる概念がしばしば援用される．

McCoy は，キアスムスの定義について下記のように述べた[21]．

> Chiasmus (or chiasm) is an important structural device/form commonly found in ancient literature and oratory, both secular and sacred. Robert Norrman's concise definition, which affirms that chiasmus involves "the use of bilateral symmetry about a central axis," well describes its basic essence. However, the present author's definition of chiasmus as "the use of inverted parallelism of form and/or content which moves toward and away from a strategic central component" intentionally goes beyond Norrman's statement in that it more explicitly mentions the literary dynamics of chiasmus in its fullest technical sense.

[3]新約聖書を構成する各巻の呼称は，いわゆる口語訳聖書（1955 年版）[8]のものを採用した．なお，本稿で聖書箇所を引用する際には，当該 1955 年版を使用した．日本において，現在一般的にはいわゆる新共同訳聖書が頻用されており，近年では聖書協会共同訳聖書も使用され始められた．本稿で口語訳聖書当該版を使用した理由は，ひとえに現在において著作権が切れているところにある．本稿での引用は当然に学術・研究を目的とするものであり適法であるのだが，テキスト全体に対する引用した分量が大部分にわたることを考慮し，かかる判断をした．なお，本稿の前提は，各訳本や版の種類（口語訳，新共同訳，聖書協会共同訳とそれぞれの版）の差異が本稿の結論に影響を及ぼすことがないというものである．
[4]本稿では，これを「特徴①」と呼ぶ．
[5]本稿では，これを「特徴②」と呼ぶ．
[6]本稿では，これを「特徴③」と呼ぶ．
[7]本稿では，これを「特徴④」と呼ぶ．

つまり，キアスムスはキアスムとも呼ばれること，Norrman[22]はキアスムスを“the use of bilateral symmetry about a central axis”と定義したこと，かかる Norrman 論文の定義[22]をふまえ，McCoy[21]は，これを“the use of inverted parallelism of form and/or content which moves toward and away from a strategic central component”と再定義したことを述べた．いずれにせよ，当該構造は，以下のような対称性を持つ．

A→B→・・・→X[8]→・・・→B′→A′

つまり，テキストにおける構造上の前半に次々に出現する要素（A，B など）は，後半では，前半とは逆の順序で出現する．この点は，Norrman および McCoy の上述の定義と一致している．本稿では，対応する要素が同心円状に配列した構造をキアスムスと呼ぶことにする．

ここで，キアスムスの規模について示す．キアスムスは，規模により，呼称を区別する場合がある．フレーズやセンテンスを範囲とするキアスムスは，ミクロキアスムス（micro chiasmus）あるいはミクロ構造（micro structure）によるキアスムスと呼ばれる．段落，セクション，ペリコーペを範囲とする場合はマクロキアスムス（macro chiasmus）あるいはマクロ構造（macro structure）によるキアスムスと呼ばれる．こうした点について，Heath[23]は次のように言及した．

> “Micro-structure” will be used for a phrase/sentence level chiasmus structure which would generally be ABB'A' or ABCB'A'. The chiasmus which spans a larger chunk of discourse will be referred to as a “macro-structure.” These macro-structures emulate the same characteristics of the phrase/sentence level chiasmus, but they are an expansion of the structure over the paragraph, section, and pericope levels.

ただし，ここでのミクロキアスムスとマクロキアスムスの区別は厳密なものではない．さらに，書籍全体を覆う規模のキアスムスも知られており，これは書籍レベルのキアスムス（book level chiasmus）などと呼ばれる．本稿では，書籍レベルのキアスムスを便宜上「構造的キアスムス」と呼ぶことにする．構造的キアスムスの事例としては，例えば，Thomas[24]に掲載された「ヨハネの第一の手紙」における下記のキアスムスがある[9]．

A —1.1-4—Prologue–Eternal Life
　B —1.5–2.2—Making Him a Liar (Walking)
　　C —2.3-17—New Commandment
　　D —2.18-27—Antichrists
　　E —2.28–3.10—Confidence–Do Not Sin
　　F —3.11-18—Love One Another
　　E′ —3.19-24—Confidence Keep the Commands
　　D′ —4.1-6—Antichrists
　　C′ —4.7–5.5—God’s Love and Ours
　B′ —5.6-12—Making Him a Liar (Testimony)
A′ —5.13-21—Conclusion–Eternal Life

続いて，裏返し構造についてである．上述のように，キアスムスは，対応する要素が同心円状に配列した構造である．ここで，あるテキストにおいて，構造的キアスムスを構成する要素の対応のすべてが対照的である場合，これを裏返し構造と呼ぶ．ここで，大林論文[1]では，キアスムスを構成する対応どうしが，同じテーマでありながらも後半の要素では前半の要素の否定・対立あるいは正反対の関係である場合，この関係性を「対照的」と呼んだ．かかる大林による「対照的」の定義を本稿においても適用し，同様の特徴を持つ関係性を「対照的」と呼ぶことにする．

大林[1]は，「イザナキの黄泉国訪問譚」が典型的な異郷訪問譚であり，かつ，裏返し構造であることを示した．以下は，大林が示した構造である．

A　出産：汚れにより文化の神生る
　B　神発生：肉体から殺害により発生
　　C　応待：友好的・内
　　D　食物を食べる
　　：煮たもの，女神は現世に還れない
　　X 腐敗した女神を見る
　　D′　食物を食べる
　　：生のもの、男神は現世に還れる
　　C′　応待：敵対的・外
　B′　神発生：外被から殺害によらず発生
A′　出産：汚れの除去により自然の神生る

[8]「X」は，キアスムスにおける構造上の中央に位置する，対応を持たない要素を指す．
[9]Thomas の論文[24]では X を F で表現している．

この「イザナキの黄泉国訪問」にみとめられる構造は，まず，当該物語全体を範囲としている．かつ，A と A′，B と B′，C と C′，D と D′がそれぞれ対応しており，同心円状に配列している．なお，X は対応がない要素である．以上は，当該物語の構造が構造的キアスムスであることを示している．同時に，当該キアスムスを構成する要素の対応のすべてが対照的であるため，裏返し構造でもある．

## ３．方法

本稿では，テキストの分析に際し，まず，テキストが異郷訪問譚といえるか否かを，2 節の異郷訪問譚の定義と照合することにより判別する．そのうえで，2 節の裏返し構造の定義に基づき，テキストが裏返し構造といえるか否かの検証をおこなうことにする．

その際，従前の研究によって既に提示された，テキストにおける構造的キアスムスを前提としたうえで，かかる構造的キアスムスが裏返し構造といえるかについて検証をおこなうことにする．

## ４．構造的キアスムス

テキストに対する構造的キアスムスを提示した先行研究には，Bligh 論文[25]と村井論文[26]がある．Bligh が示したキアスムスは次の通りである[10]．

A　Prologue, 1:1-1:12
　B　Autobiographical Section, 1:13-2:10
　　C　Justification by Faith, 2:11-3:4
　　D　Arguments from Scripture, 3:5-3:29
　　E　Central Chiasm, 4:1-4:10
　　D′　Arguments from Scripture, 4:11-4:31
　　C′　Justification by Faith, 5:1-5:10
　B′　Moral Section, 5:11-6:11
A′　Epilogue, 6:12-6:18

Bligh 図式は，A と A′，B と B′，C と C′，D と D′の要素対が，E を中心として同心円状に配列した構造である．当該図式は本稿のキアスムスの定義に当てはまる．さらに，当該図式の範囲は，1 章 1 節から 6 章 18 節であり，これは，テキストの全範囲を意味する．したがい，Bligh 図式は，構造的キアスムスでもある．ただし，Bligh は，かかる図式を示し，各要素を提示したものの，B・B′以外の各要素対に関する説明は示されていない．

一方，村井が示したキアスムスは次の通りである[11]．

1 挨拶（1:1-5）
　2 ほかの福音はない（1:6-12）
　　3 パウロが使徒として選ばれた次第（1:13-2:14）
　　4 すべての人は信仰によって義とされる（2:15-21）
　　5 律法によるか，信仰によるか（3:1-14）
　　6 アブラハムへの約束（3:15-22）
　　7 相続人（3:23-4:7）
　　8 ガラテヤの人々への叱責（4:8-18）
　　9 二人の女のたとえ（4:19-31_5:1）
　　10 キリスト者の自由（5:2-14）
　　11 霊の実と肉の業（5:15-26）
　　12 信仰に基づいた助け合い（6:1-10）
　13 結びの言葉（6:11-18）

村井図式では，1 と 13，2 と 12，3 と 11，4 と 10，5 と 9，6 と 8 がそれぞれ要素対である．同時にかかる要素対は 7 を構造上の中心として同心円状に配列している．したがい，この図式も本稿の定義に基づくキアスムスである．かつ，当該図式の範囲は 1 章 1 節から 6 章 18 節であり，これはテキストの全範囲を意味するため，当該図式は構造的キアスムスでもある．

なお，Bligh 図式および村井図式には，かかる図式を構成する要素対の関係性が対照的であるか否かの言及がない．かつ，Bligh 論文および村井論文には，それぞれの図式が裏返し構造であるか否かの直接的言及もない．

Bligh 図式と村井図式は，同一テキストにみいだされる構造的キアスムスを示したものである．ところが，それぞれの図式を構成する要素対の数と，キアスムスの構造上の中心に位置する要素（X[12]）がテキストで占める場所が異なっている．以上は，双方の構造的キアスムスが異なるものであること，つまり，双方の構造的キアスムスが，同一テキスト内に並列的にみとめられることを示している．

[10]本稿ではこれを「Bligh 図式」と呼ぶ．
[11]本稿ではこれを「村井図式」と呼ぶ．
[12]Bligh 図式では「E」，村井図式では「7」と表記している．

本稿では，テキストにみとめられる構造的キアスムスをふまえて，当該キアスムスが裏返し構造でもあるといえるか否かの検証をおこなう．ここで，双方の図式が異なる構造的キアスムスであるからには，双方についてそれぞれ調査をおこなう必要があるのだが，本稿では，提示された時期が古いキアスムスである Bligh 図式に関する検証をおこなうこととし，村井図式については，本検証を前提に別の機会に検証することにする．

## ５．テキストは異郷訪問譚といえるか

テキストは，ガラテヤ地方に居住するキリスト教信徒に対して書かれた，パウロによる書簡形式の文書である．一般的に，書簡は，通念上の物語とはいえない．かつ，当該テキストには主人公が存在しない．以上は，テキストが通念上の物語ではなく，異郷訪問譚とはいえないことを示している．以上をふまえつつも，本節では，テキストを特徴①～④と照合することにより，テキストが異郷訪問譚といえるか否かの判別をおこなうことにする．

**特徴①：**テキストには主人公が存在しない．したがって，テキストにおいて主人公が異郷に入る記載はなく，当然に，かかる主人公による異郷への侵入が偶然によるという記載もない．以上より，テキストが特徴①と合致しない．

**特徴②：**テキストには，主人公による異界への侵入に関する記載がないため，異郷での主人公の体験も描かれていない．以上は，テキストが特徴②と合致しないことを示している．

**特徴③：**テキストでは，主人公が異郷に入る記載がない．したがって，当然に，異郷から出ることもない．以上はテキストが特徴③と合致していないことを意味する．

**特徴④：**テキストには，主人公による異郷への入出が描かれていないため，かかる異郷への入出にともなう主人公の変化も存在しない．以上は，テキストが特徴④と合致しないことを示している．

以上のように，テキストを特徴①～④と照合したところ，すべてに合致しないことが判明した．よって，テキストは異郷訪問譚とはいえない．

## ６．Bligh 図式は裏返し構造であるか

本節では，Bligh 図式を構成する要素対ごとに，かかる関係性がはたして対照的であるといえるかの検証をおこなう．

### A・A´

A はテキストの 1 章 1 節から 1 章 12 節の範囲であり，Bligh は「Prologue」と位置づけた．当該範囲を以下に示す．

人々からでもなく，人によってでもなく，イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによって立てられた使徒パウロ，ならびにわたしと共にいる兄弟たち一同から，ガラテヤ諸教会へ．わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから，恵みと平安とが，あなたがたにあるように．キリストは，わたしたちの父なる神の御旨に従い，わたしたちを今の悪の世から救い出そうとして，ご自身をわたしたちの罪のためにささげられたのである．栄光が世々限りなく神にあるように，アァメン．あなたがたがこんなにも早く，あなたがたをキリストの恵みの内へお招きになったかたから離れて，違った福音に落ちていくことが，わたしには不思議でならない．それは福音というべきものではなく，ただ，ある種の人々があなたがたをかき乱し，キリストの福音を曲げようとしているだけのことである．しかし，たといわたしたちであろうと，天からの御使であろうと，わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら，その人はのろわるべきである．わたしたちが前に言っておいたように，今わたしは重ねて言う．もしある人が，あなたがたの受けいれた福音に反することを宣べ伝えているなら，その人はのろわるべきである．今わたしは，人に喜ばれようとしているのか，それとも，神に喜ばれようとしているのか．あるいは，人の歓心を買おうと努めているのか．もし，今もなお人の歓心を買おうとしているとすれば，わたしはキリストの僕ではあるまい．兄弟たちよ．あなたがたに，はっきり言っておく．わたしが宣べ伝えた福音は人間によるものではない．わたしは，それを人間から受けたのでも教えられたのでもなく，ただイエス・キリストの啓示によったのである．

ここの箇所は，Bligh が指摘するように，テキスト全体の導入部分であるので「Prologue」である．

一方，A′は，テキストの 6 章 12 節から 6 章 18 節の範囲であり，Bligh は「Epilogue」と位置づけた．ここに相当する範囲を次に示す．

> いったい，肉において見えを飾ろうとする者たちは，キリスト・イエスの十字架のゆえに，迫害を受けたくないばかりに，あなたがたにしいて割礼を受けさせようとする．事実，割礼のあるもの自身が律法を守らず，ただ，あなたがたの肉について誇りたいために，割礼を受けさせようとしているのである．しかし，わたし自身には，わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に，誇とするものは，断じてあってはならない．この十字架につけられて，この世はわたしに対して死に，わたしもこの世に対して死んでしまったのである．割礼のあるなしは問題ではなく，ただ，新しく造られることこそ，重要なのである．この法則に従って進む人々の上に，平和とあわれみとがあるように．また，神のイスラエルの上にあるように．だれも今後は，わたしに煩いをかけないでほしい．わたしは，イエスの焼き印を身に帯びているのだから．兄弟たちよ．わたしたちの主イエス・キリストの恵みが，あなたがたの霊と共にあるように，アァメン．

この箇所は，Bligh が言及したように，テキスト全体を終結させる箇所であるので「Epilogue」である．

そもそもこのテキストの全体のテーマは，かつてパウロが教示した福音とは異なる福音を信じてしまったガラテヤ信徒を再びパウロの福音のもとへと導き返そうとするところにある．A「Prologue」と A′「Epilogue」では，こうしたテーマの所在が提示されている．さらに，A では，パウロの福音に反する場合の「呪い」が述べられている．それに対し，A′では，当該パウロの福音にしたがう者への「祝福」が述べられている．つまり，A と A′は，ともに，パウロの福音にしたがうことの重要性が述べられているものの，A は，したがわない場合の「呪い」であるのに対し，A′は，したがう場合の「祝福」が述べられている．ここで，「祝福」と「呪い」は正反対の意味を持つ用語であり，かつ，双方の箇所は，パウロの福音にしたがう必要性についての正反対の観点による論証であるため，これらは対照的である．

| 要素 | 特徴 |
|---|---|
| A　Prologue | 福音にしたがわない→呪い |
| A′　Epilogue | 福音にしたがう→祝福 |

以上は，A「Prologue」と A′「Epilogue」は同一テーマでありながら対照的な記述であることを示している[13]．

**B・B′**

B は，テキストにおける 1 章 13 節から 2 章 10 節の範囲である．また，Bligh はこの範囲を「Autobiographical Section」と位置づけた．以下は，当該箇所の引用である．

> ユダヤ教を信じていたころのわたしの行動については，あなたがたはすでによく聞いている．すなわち，わたしは激しく神の教会を迫害し，また荒しまわっていた．そして，同国人の中でわたしと同年輩の多くの者にまさってユダヤ教に精進し，先祖たちの言伝えに対して，だれよりもはるかに熱心であった．ところが，母の胎内にある時からわたしを聖別し，み恵みをもってわたしをお召しになったかたが，異邦人の間に宣べ伝えさせるために，御子をわたしの内に啓示して下さった時，わたしは直ちに，血肉に相談もせず，また先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず，アラビヤに出て行った．それから再びダマスコに帰った．その後三年たってから，わたしはケパをたずねてエルサレムに上り，彼のもとに十五日間，滞在した．しかし，主の兄弟ヤコブ以外には，ほかのどの使徒にも会わなかった．ここに書いていることは，神のみまえで言うが，決して偽りではない．その後，わたしはシリヤとキリキヤとの地方に行った．しかし，キリストにあるユダヤの諸教会には，顔を知られていなかった．ただ彼らは，「かつて自分たちを迫害した者が，以前には撲滅しようとしていたその信仰を，今は宣べ伝えている」と聞き，わたしのことで，神をほめたたえた．その後十四年たってから，わたしはバル

[13]そもそも「prologue」と「Epilogue」は対照的なものであり，双方とも，本編主題を補足する意味を持つ．

ナバと一緒に，テトスをも連れて，再びエルサレムに上った．そこに上ったのは，啓示によってである．そして，わたしが異邦人の間に宣べ伝えている福音を，人々に示し，「重だった人たち」には個人的に示した．それは，わたしが現に走っており，またすでに走ってきたことが，むだにならないためである．しかし，わたしが連れていたテトスでさえ，ギリシヤ人であったのに，割礼をしいられなかった．それは，忍び込んできたにせ兄弟らがいたので—彼らが忍び込んできたのは，キリスト・イエスにあって持っているわたしたちの自由をねらって，わたしたちを奴隷にするためであった．わたしたちは，福音の真理があなたがたのもとに常にとどまっているように，瞬時も彼らの強要に屈服しなかった．そして，かの「重だった人たち」からは—彼らがどんな人であったにしても，それは，わたしには全く問題ではない．神は人を分け隔てなさらないのだから—事実，かの「重だった人たち」は，わたしに何も加えることをしなかった．それどころか，彼らは，ペテロが割礼の者への福音をゆだねられているように，わたしには無割礼の者への福音がゆだねられていることを認め，（というのは，ペテロに働きかけて割礼の者への使徒の務につかせたかたは，わたしにも働きかけて，異邦人につかわして下さったからである），かつ，わたしに賜わった恵みを知って，柱として重んじられているヤコブとケパとヨハネとは，わたしとバルナバとに，交わりの手を差し伸べた．そこで，わたしたちは異邦人に行き，彼らは割礼の者に行くことになったのである．ただ一つ，わたしたちが貧しい人々をかえりみるようにとのことであったが，わたしはもとより，この事のためにも大いに努めてきたのである．

この箇所は，Bligh が指摘したように，パウロの自伝的記述である．自伝としての記載された時期的範囲は，パウロがユダヤ教徒である時期と回心前後，その約 14 年後のエルサレムでの出来事までが含まれている．つまり，言い換えれば，この箇所はパウロの過去の外形的行為の記録である．

一方，B′は，テキストの 5 章 11 節から 6 章 11 節の範囲であり，Bligh は当該箇所を「Moral Section」と位置づけた．ここに相当する範囲を次に示す．

兄弟たちよ．わたしがもし今でも割礼を宣べ伝えていたら，どうして，いまなお迫害されるはずがあろうか．そうしていたら，十字架のつまずきは，なくなっているであろう．あなたがたの煽動者どもは，自ら不具になるがよかろう．兄弟たちよ．あなたがたが召されたのは，実に，自由を得るためである．ただ，その自由を，肉の働く機会としないで，愛をもって互に仕えなさい．律法の全体は，「自分を愛するように，あなたの隣り人を愛せよ」というこの一句に尽きるからである．気をつけるがよい．もし互にかみ合い，食い合っているなら，あなたがたは互に滅ぼされてしまうだろう．わたしは命じる，御霊によって歩きなさい．そうすれば，決して肉の欲を満たすことはない．なぜなら，肉の欲するところは御霊に反し，また御霊の欲するところは肉に反するからである．こうして，二つのものは互に相さからい，その結果，あなたがたは自分でしようと思うことを，することができないようになる．もしあなたがたが御霊に導かれるなら，律法の下にはいない．肉の働きは明白である．すなわち，不品行，汚れ，好色，偶像礼拝，まじない，敵意，争い，そねみ，怒り，党派心，分裂，分派，ねたみ，泥酔，宴楽，および，そのたぐいである．わたしは以前も言ったように，今も前もって言っておく．このようなことを行う者は，神の国をつぐことがない．しかし，御霊の実は，愛，喜び，平和，寛容，慈愛，善意，忠実，柔和，自制であって，これらを否定する律法はない．キリスト・イエスに属する者は，自分の肉を，その情と欲と共に十字架につけてしまったのである．もしわたしたちが御霊によって生きるのなら，また御霊によって進もうではないか．互にいどみ合い，互にねたみ合って，虚栄に生きてはならない．兄弟たちよ．もしもある人が罪過に陥っていることがわかったなら，霊の人であるあなたがたは，柔和な心をもって，その人を正しなさい．それと同時に，もしか自分自身も誘惑に陥ることがありはしないかと，反省しなさい．互に重荷を負い合いなさい．そうすれば，あなたがたはキリストの律法を全うするであろう．もしある人が，事実そうでないのに，自分が何か偉い者であるように思っているとすれば，その人は自分を欺いているのである．ひとりびとり，自分の行いを検討してみる

がよい．そうすれば，自分だけには誇ることができても，ほかの人には誇れなくなるであろう．人はそれぞれ，自分自身の重荷を負うべきである．御言を教えてもらう人は，教える人と，すべて良いものを分け合いなさい．まちがってはいけない．神は侮られるようなかたではない．人は自分のまいたものを，刈り取ることになる．すなわち，自分の肉にまく者は，肉から滅びを刈り取り，霊にまく者は，霊から永遠のいのちを刈り取るであろう．わたしたちは，善を行うことに，うみ疲れてはならない．たゆまないでいると，時が来れば刈り取るようになる．だから，機会のあるごとに，だれに対しても，とくに信仰の仲間に対して，善を行おうではないか．ごらんなさい．わたし自身いま筆をとって，こんなに大きい字で，あなたがたに書いていることを．

この箇所は，パウロの思想に基づく信徒への道徳的指導が書かれている．かかる道徳的指導は，パウロの内面の発露であると同時に，信徒の未来を形成するものである．なお，Bligh は，当該対応について以下のように説明した．

> The correspondence between the Autobiographical Section and the Moral Section is not immediately obvious; but, as will be shown in the appropriate section of the commentary, the Moral Section is a description of Two Ways of living, or rather, of the Way of Life and the Way of Death, here called ‘walking according to the Spirit’ and ‘walking according to the flesh’. If, then, St Paul means this passage to be compared with 1:13—2:10, he must have intended the Autobiographical Passage to demonstrate that before his conversion he walked according to the flesh, and since his conversion, whatever his adversaries may say, he has walked according to the Spirit. This structural analysis of the Epistle suggests, therefore, that the main purpose of the Autobiographical Passage is not, as has often been supposed, to prove by an elaborate alibi that Paul did not receive the gospel from the other apostles, but rather to show that throughout his Christian life he has been obeying the promptings of the Holy Spirit. Readers familiar with the literature of the subject should welcome this fresh insight with relief, for the supposed alibi is notoriously incomplete, and in English law an alibi which fails is as incriminating as flight.

つまり，Bligh は，当該対応関係がすぐにはわからないと述べつつも，「霊にしたがって歩く」ことおよび「肉にしたがって歩く」ことの二種類の生き方が，B と B′のそれぞれにおいて対比的に述べられている点が双方に共通する点であると述べた．

ここで，B では，パウロが啓示を受ける以前においては，ユダヤ教徒としてキリスト教徒を迫害する立場であり，啓示以降は，かかる啓示にしたがう立場に変革し，キリスト教徒になったことが述べられている．こうした内心に受けた啓示にしたがう生き方を Bligh は「霊にしたがって歩く」生き方と表現した．また，それ以前を「肉にしたがって歩く」生き方と表現したのである．つまり，B には，パウロ個人における「肉にしたがって歩く」生き方から「霊にしたがって歩く」生き方への変革[14]が記されている．

一方，B′では，信徒に対し，自分自身の「情と欲」にしたがう生き方から「御霊によって生きる」生き方への変革をパウロは要請している．ここでの前者を Bligh は「肉にしたがって歩く」生き方と，後者を「霊にしたがって歩く」生き方と，それぞれを表現した．つまり，B′には，「肉にしたがって歩く」生き方から「霊にしたがって歩く」生き方への変革を信徒に対してパウロが要請している．

つまり，B では，パウロ自身の価値転換が表示されている一方，B′ではパウロによる信徒に対する価値転換の要請が表示されている．

| 要素 | | 特徴 |
|---|---|---|
| B | Autobiographical Section | ：自身の価値転換 |
| B′ | Moral Section | ：価値転換の要請 |

B と B′は，双方とも，価値転換がテーマであるのだが，B ではパウロ自身が対象であるのに対し，B′では，パウロが要請する立場になっている．したがい，パウロが立つ立場は双方において正反対であるため，かかる B と B′は対照的である．

さらに加え，B は，パウロの「Autobiographical

[14]「肉にしたがって歩く」生き方から「霊にしたがって歩く」生き方への変革を，本稿では便宜上「価値転換」と呼ぶ．

Section」，つまり，自己に対する過去の外形的行為の記録である．それに対し，B′はパウロの「Moral Section」，つまり道徳的指導であり，同時に，パウロの内面の表示および信徒（他者）の未来の形成について述べられている．以下は，これらの観点に関する追加の表である．

| 要素 | 特徴 |
|---|---|
| B | 外形的・過去・自己 |
| B′ | 内面的・未来・他者 |

かかるBとB′は，過去における自己の外形的行為と，内面的な思想による信徒（他者）の未来形成である．ここで，外形的と内面的，過去と未来，自己と他者は，それぞれ正反対の関係であるため，これらのすべては対照的である．

**C・C′**

Cは2章11節から3章4節の範囲であり，C′は5章1節から10節の範囲である．Bighは，この双方のテーマをともに「Justification by Faith」と定めた．

Cは次の通りである．

> ところが，ケパがアンテオケにきたとき，彼に非難すべきことがあったので，わたしは面とむかって彼をなじった．というのは，ヤコブのもとからある人々が来るまでは，彼は異邦人と食を共にしていたのに，彼らがきてからは，割礼の者どもを恐れ，しだいに身を引いて離れて行ったからである．そして，ほかのユダヤ人たちも彼と共に偽善の行為をし，バルナバまでがそのような偽善に引きずり込まれた．彼らが福音の真理に従ってまっすぐに歩いていないのを見て，わたしは衆人の面前でケパに言った，「あなたは，ユダヤ人であるのに，自分自身はユダヤ人のように生活しないで，異邦人のように生活していながら，どうして異邦人にユダヤ人のようになることをしいるのか」．わたしたちは生れながらのユダヤ人であって，異邦人なる罪人ではないが，人の義とされるのは律法の行いによるのではなく，ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて，わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである．それは，律法の行いによるのではなく，キリストを信じる信仰によって義とされるためである．なぜなら，律法の行いによっては，だれひとり義とされることがないからである．しかし，キリストにあって義とされることを求めることによって，わたしたち自身が罪人であるとされるのなら，キリストは罪に仕える者なのであろうか．断じてそうではない．もしわたしが，いったん打ちこわしたものを，再び建てるとすれば，それこそ，自分が違反者であることを表明することになる．わたしは，神に生きるために，律法によって律法に死んだ．わたしはキリストと共に十字架につけられた．生きているのは，もはや，わたしではない．キリストが，わたしのうちに生きておられるのである．しかし，わたしがいま肉にあって生きているのは，わたしを愛し，わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって，生きているのである．わたしは，神の恵みを無にはしない．もし，義が律法によって得られるとすれば，キリストの死はむだであったことになる．ああ，物わかりのわるいガラテヤ人よ．十字架につけられたイエス・キリストが，あなたがたの目の前に描き出されたのに，いったい，だれがあなたがたを惑わしたのか．わたしは，ただこの一つの事を，あなたがたに聞いてみたい．あなたがたが御霊を受けたのは，律法を行ったからか，それとも，聞いて信じたからか．あなたがたは，そんなに物わかりがわるいのか．御霊で始めたのに，今になって肉で仕上げるというのか．あれほどの大きな経験をしたことは，むだであったのか．まさか，むだではあるまい．

この箇所においてパウロは，信仰による義認の正統性を主張している．その際，まずパウロはケパやバルナバらがおこなった偽善を責め，さらに，ガラテヤの信徒らに対しても「ああ，物わかりのわるいガラテヤ人よ」，「あなたがたは，そんなに物わかりがわるいのか」と，彼らの物わかりの悪さを非難した．

C′は以下の通りである．

> 自由を得させるために，キリストはわたしたちを解放して下さったのである．だから，堅く立って，二度と奴隷のくびきにつながれてはならない．見よ，このパウロがあなたがたに言う．も

し割礼を受けるなら，キリストはあなたがたに用のないものになろう．割礼を受けようとするすべての人たちに，もう一度言っておく．そういう人たちは，律法の全部を行う義務がある．律法によって義とされようとするあなたがたは，キリストから離れてしまっている．恵みから落ちている．わたしたちは，御霊の助けにより，信仰によって義とされる望みを強くいだいている．キリスト・イエスにあっては，割礼があってもなくても，問題ではない．尊いのは，愛によって働く信仰だけである．あなたがたはよく走り続けてきたのに，だれが邪魔をして，真理にそむかせたのか．そのような勧誘は，あなたがたを召されたかたから出たものではない．少しのパン種でも，粉のかたまり全体をふくらませる．あなたがたはいささかもわたしと違った思いをいだくことはないと，主にあって信頼している．しかし，あなたがたを動揺させている者は，それがだれであろうと，さばきを受けるであろう．

この箇所においても，パウロは，信仰による義認の正統性を訴えている．その際，パウロは，ガラテヤの信徒に対し，「あなたがたはよく走り続けてきた」こと，「あなたがたはいささかもわたしと違った思いをいだくことはないと，主にあって信頼している」ことを述べ，彼らを擁護したうえで信頼を抱いているという意思表示をした．そのうえで，かかる責任の所在を彼ら以外の所においた．

| 要素 | 特徴 | |
|---|---|---|
| C | Justification by Faith | ：非難による |
| C′ | Justification by Faith | ：擁護による |

つまり，C と C′は，ともに信仰による義認をテーマとしている点においては一致しているのであるが，C ではパウロはガラテヤの信徒らを非難しているが，C′ではむしろ擁護している．かかる非難と擁護は正反対の意味を持つ用語であるので対照的である．

かかる C と C′におけるパウロによる非難と擁護は，同一の人々（信徒）を対象としている．つまり，同一信徒に対して一方では非難し，他方では擁護しているのであり，これを一見すると矛盾にみえる可能性がある．この点については以下の通りである．C では，パウロが信徒の非の部分（つまり，パウロの福音にしたがわない心性）を責めることを通じ，彼らの改心を促した．対し，C′では，信徒に内在するパウロの福音にしたがう心性の部分（これを「是」とする）への信頼の表明として彼らを擁護した．つまり，C では信徒の非の部分を責め，C′では是の部分を擁護したのである．同一信徒に内在した正反対の心性に対し，パウロは別個に指摘したのであり，双方の指摘は相互補完関係であるといえる．

**D・D′**

D の範囲は 3 章 5 節から 29 節である．また，D′の範囲は 4 章 11 節から 31 節である．Bligh は，当該対応のテーマを「Arguments from Scripture」と定めた．

D は以下の通りである．

すると，あなたがたに御霊を賜い，力あるわざをあなたがたの間でなされたのは，律法を行ったからか，それとも，聞いて信じたからか．このように，アブラハムは「神を信じた．それによって，彼は義と認められた」のである．だから，信仰による者こそアブラハムの子であることを，知るべきである．聖書は，神が異邦人を信仰によって義とされることを，あらかじめ知って，アブラハムに，「あなたによって，すべての国民は祝福されるであろう」との良い知らせを，予告したのである．このように，信仰による者は，信仰の人アブラハムと共に，祝福を受けるのである．いったい，律法の行いによる者は，皆のろいの下にある．「律法の書に書いてあるいっさいのことを守らず，これを行わない者は，皆のろわれる」と書いてあるからである．そこで，律法によっては，神のみまえに義とされる者はひとりもないことが，明らかである．なぜなら，「信仰による義人は生きる」からである．律法は信仰に基いているものではない．かえって，「律法を行う者は律法によって生きる」のである．キリストは，わたしたちのためにのろいとなって，わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった．聖書に，「木にかけられる者は，すべてのろわれる」と書いてある．それは，アブラハムの受けた祝福が，イエス・キリストにあって異邦人に及ぶためであり，約束された御霊を，わたしたちが信仰によって受けるためである．

兄弟たちよ．世のならわしを例にとって言おう．人間の遺言でさえ，いったん作成されたら，これを無効にしたり，これに付け加えたりすることは，だれにもできない．さて，約束は，アブラハムと彼の子孫とに対してなされたのである．それは，多数をさして「子孫たちとに」と言わずに，ひとりをさして「あなたの子孫とに」と言っている．これは，キリストのことである．わたしの言う意味は，こうである．神によってあらかじめ立てられた契約が，四百三十年の後にできた律法によって破棄されて，その約束がむなしくなるようなことはない．もし相続が，律法に基いてなされるとすれば，もはや約束に基いたものではない．ところが事実，神は約束によって，相続の恵みをアブラハムに賜わったのである．それでは，律法はなんであるか．それは違反を促すため，あとから加えられたのであって，約束されていた子孫が来るまで存続するだけのものであり，かつ，天使たちをとおし，仲介者の手によって制定されたものにすぎない．仲介者なるものは，一方だけに属する者ではない．しかし，神はひとりである．では，律法は神の約束と相いれないものか．断じてそうではない．もし人を生かす力のある律法が与えられていたとすれば，義はたしかに律法によって実現されたであろう．しかし，約束が，信じる人々にイエス・キリストに対する信仰によって与えられるために，聖書はすべての人を罪の下に閉じ込めたのである．しかし，信仰が現れる前には，わたしたちは律法の下で監視されており，やがて啓示される信仰の時まで閉じ込められていた．このようにして律法は，信仰によって義とされるために，わたしたちをキリストに連れて行く養育掛となったのである．しかし，いったん信仰が現れた以上，わたしたちは，もはや養育掛のもとにはいない．あなたがたはみな，キリスト・イエスにある信仰によって，神の子なのである．キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは，皆キリストを着たのである．もはや，ユダヤ人もギリシヤ人もなく，奴隷も自由人もなく，男も女もない．あなたがたは皆，キリスト・イエスにあって一つだからである．もしキリストのものであるなら，あなたがたはアブラハムの子孫であり，約束による相続人なのである．

D において，パウロは，ガラテヤの信徒に対し，キリストへの信仰を持った時点ですでに「神の子」であるということを，アブラハムとその子孫との関係から言及した．つまり，たとえ出自がどうであったとしても，キリストへの信仰を根拠に，当該人物がアブラハムの子孫であり，かつアブラハムの相続人であると主張した．なお，ここでの「アブラハムの子孫」という記述は，実際のアブラハムの子孫であることを指すものではない．むしろ，キリストへの信仰を持った時点でキリストの「相続人」となるということに対する比喩表現である．

一方，D′は以下の通りである．

わたしは，あなたがたのために努力してきたことが，あるいは，むだになったのではないかと，あなたがたのことが心配でならない．兄弟たちよ．お願いする．どうか，わたしのようになってほしい．わたしも，あなたがたのようになったのだから．あなたがたは，一度もわたしに対して不都合なことをしたことはない．あなたがたも知っているとおり，最初わたしがあなたがたに福音を伝えたのは，わたしの肉体が弱っていたためであった．そして，わたしの肉体にはあなたがたにとって試錬となるものがあったのに，それを卑しめもせず，またきらいもせず，かえってわたしを，神の使かキリスト・イエスかでもあるように，迎えてくれた．その時のあなたがたの感激は，今どこにあるのか．はっきり言うが，あなたがたは，できることなら，自分の目をえぐり出してでも，わたしにくれたかったのだ．それだのに，真理を語ったために，わたしはあなたがたの敵になったのか．彼らがあなたがたに対して熱心なのは，善意からではない．むしろ，自分らに熱心にならせるために，あなたがたをわたしから引き離そうとしているのである．わたしがあなたがたの所にいる時だけでなく，いつも，良いことについて熱心に慕われるのは，良いことである．ああ，わたしの幼な子たちよ．あなたがたの内にキリストの形ができるまでは，わたしは，またもや，あなたがたのために産みの苦しみをする．できることなら，わたしは今あなたがたの所にいて，語調を変えて話してみたい．わたしは，あなたがたのことで，途方にくれている．律法の下にとどまっていたいと思う人たちよ．わたしに答えなさい．あなた

がたは律法の言うところを聞かないのか．そのしるすところによると，アブラハムにふたりの子があったが，ひとりは女奴隷から，ひとりは自由の女から生れた．女奴隷の子は肉によって生れたのであり，自由の女の子は約束によって生れたのであった．さて，この物語は比喩としてみられる．すなわち，この女たちは二つの契約をさす．そのひとりはシナイ山から出て，奴隷となる者を産む．ハガルがそれである．ハガルといえば，アラビヤではシナイ山のことで，今のエルサレムに当る．なぜなら，それは子たちと共に，奴隷となっているからである．しかし，上なるエルサレムは，自由の女であって，わたしたちの母をさす．すなわち，こう書いてある，「喜べ，不妊の女よ．声をあげて喜べ，産みの苦しみを知らない女よ．ひとり者となっている女は多くの子を産み，その数は，夫ある女の子らよりも多い」．兄弟たちよ．あなたがたは，イサクのように，約束の子である．しかし，その当時，肉によって生れた者が，霊によって生れた者を迫害したように，今でも同様である．しかし，聖書はなんと言っているか．「女奴隷とその子とを追い出せ．女奴隷の子は，自由の女の子と共に相続をしてはならない」とある．だから，兄弟たちよ．わたしたちは女奴隷の子ではなく，自由の女の子なのである．

ここでは，D と同様に，アブラハムの相続者について言及した一方，アブラハムの子孫であるからといっても，奴隷であるハガルの子どもの場合は相続権がないことも述べられた．ここでのアブラハムの相続権についての話は，D の場合とは異なり，実際のアブラハムに関するもの（つまり直接表現）であり，比喩表現ではない．

まず，D と D′では，ともに，アブラハムおよび関連する人物に言及しつつ相続権について述べられている．つまり，双方のテーマは相続権である．そのうえで，D では，アブラハムの子孫であれば相続権を保有することが述べられており，かつ，奴隷や自由人といった出自を超越することができることがのべられているが，D′では，これを否定し，同じアブラハムの子孫であるからといっても無条件に相続権を保有するわけではないこと，つまり，同じアブラハムの子孫であったとしても，自由の女の子孫であれば相続権があるが，奴隷の女の子孫であれば相続権が否定されることが述べられている．

| 要素 | 特徴 |
|---|---|
| D | 聖書での〈相続権〉の議論：出自を超越 |
| D′ | 聖書での〈相続権〉の議論：出自による区別 |

かかる相続権に関しては，「出自による区別」が「出自の超越」の否定であるため，双方は対照的である．

さらに，上述のように，D におけるアブラハムと相続人の物語は，あくまでもキリストと信徒の関係に対する比喩であるのだが，D′は実際のアブラハムと相続人に関する話であり比喩表現ではない．以下は，かかる点に関する追加の表である．

| 要素 | 特徴 |
|---|---|
| D | 比喩表現 |
| D′ | 実際（比喩表現の否定） |

こうしたアブラハムの物語の援用方法についても，比喩表現によるものと実際（比喩表現の否定）によるものとでは対照的である．

以上より，Bligh 図式を構成する要素対 A・A′，B・B′，C・C′，D・D′の関係は，すべて対照的である．なお，E は，対応を構成しない要素である．したがって，当該図式は裏返し構造の特徴を満たしており，かかる図式に基づけば，テキストは裏返し構造である．

## 7．まとめ

本稿では，新約聖書に収納された巻であるガラテヤ人への手紙が裏返し構造であるか否かの検証をおこなった．その際，当該テキストにおける既知の構造的キアスムスである Bligh 図式を前提に，かかる図式を構成する要素対が対照的な関係であるか否かを確認することによる判別をおこなった．かかる確認の結果，当該図式を構成するすべての要素対が対照的な関係であることが明らかになったため，裏返し構造の要件を十分に備えていることが判明した．以上より当該テキストが裏返し構造であることが確認できた．ここで，本テキストであるガラテヤ人への手紙には，他のキアスムスとして，例えば村井図式が知られている．しかしながら，本稿では Bligh 図式以外の図式に関する裏返し構造の観点による分析はおこなわなかった．

つまり，本稿の知見はあくまでも Bligh 図式を前提とするものである．

なお，テキストは，通念上の異郷訪問譚ではない．かつ，本稿の定義に基づく異郷訪問譚でもない．つまり，本テキストでは，異郷訪問譚とはいえないにもかかわらず，裏返し構造がみとめられた．

新約聖書は合計 27 巻によって構成されている．従前の研究では，検証された 12 巻のすべてが裏返し構造からなることが示された．本稿の検証により，新たに一つの巻が裏返し構造であることが確認された．そもそも，本稿の目的は，新約聖書テキストにおいて，異郷訪問譚とはいえないにもかかわらず裏返し構造がみとめられる蓋然性を調査するところにあった．本稿の検証結果は，かかる蓋然性の高さを支持するものである．

一方，1 節で述べたように，新約聖書テキストの構造評価については，あくまでも個別の判断が必要である．したがい，本稿の調査結果が，即座に新約聖書全般の特徴を評価するものとはならない．筆者としては，残りの他のテキストについても調査・検証することにより，当該蓋然性を確認するつもりである．なお，本稿で検証しなかった村井図式についても，本稿と同様の検証をおこなうことにより，本稿の知見と比較する予定である．

## 引用文献

[1]大林太良．異郷訪問譚の構造．口承文芸研究．1979, (2), p. 1-9.
[2]加藤泰．済州島の二つの神話の構造分析．民族学研究．1979, 44(1), p. 83-90.
[3]依田千百子．韓国の異郷訪問譚の構造．口承文芸研究．1982, (5), p. 47-57.
[4]大喜多紀明．長編アニメーション映画『崖の上のポニョ』の構造分析：2 編の小さな異郷訪問譚の接合．人間生活文化研究．2017, (27), p. 1-13.
[5]大喜多紀明．芥川龍之介『トロッコ』の裏返し構造：良平の「新生」場面の機能．国語論集．2018, (15), p. 45-52.
[6]大喜多紀明．アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造：異郷訪問譚によらない事例．北海道言語文化研究．2016, (14), p. 45-72.
[7]大喜多紀明．聖書「創世記」冒頭の 5 つの物語の構造：異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例．北海道言語文化研究．2017, (15), p. 195-216.
[8]日本聖書協会．聖書．日本聖書協会，1955.
[9] 大喜多紀明．新約聖書「マタイによる福音書」における裏返し構造：James B. Jordan の図式に基づく検証．人文×社会．2022, (5), p. 193-212.
[10]大喜多紀明．「ルカによる福音書」全体における裏返し構造．人間生活文化研究．2018, (28), p. 75-81.
[11]大喜多紀明．新約聖書「ローマ人への手紙」における裏返し構造：Drake モデルにみとめられるキアスムスに基づく検証．北海道言語文化研究．2023, (21), p. 71-93.
[12]大喜多紀明．新約聖書テキストにおける異郷訪問譚と裏返し構造の関係：「テトスへの手紙」と「ヘブル人への手紙」の場合．人文×社会．2021, (4), p. 79-96.
[13]大喜多紀明．新約聖書に収納された「ピレモンへの手紙」にみられる裏返し構造．人間生活文化研究．2019, (29), p. 293-298.
[14]大喜多紀明．新約聖書「ヤコブの手紙」にみとめられる裏返し構造：「物語」とはいえないテキストの事例．人間生活文化研究．2019, (29), p. 15-21.
[15]大喜多紀明．新約聖書「ペテロの第一の手紙」における裏返し構造．北海道言語文化研究．2022, (20), p. 1-19.
[16]大喜多紀明．新約聖書「ヨハネの第一の手紙」における裏返し構造：Berge が提示したキアスムス構造に基づく検証．人文×社会．2022, (7), p. 87-99.
[17]大喜多紀明．新約聖書に収納された「ヨハネの第二の手紙」の構造：裏返し構造をあてはめる観点からの分析．人間生活文化研究．2020, (30), p. 308-311.
[18]大喜多紀明．新約聖書「ヨハネの第三の手紙」にみられる裏返し構造．人文×社会．2021, (1), p. 451-459.
[19]大喜多紀明．新約聖書「ユダの手紙」にみとめられる裏返し構造．人間生活文化研究．2020, (30), p. 353-357.
[20]西條勉．千と千尋の神話学．新典社新書，2009.
[21]McCoy, Brad. Chiasmus: An Important Structural Device Commonly Found in Biblical Literature. Chafer Theological Seminary Journal, 2003, 9(2), p. 17-34.
[22]Norrman, Ralf. Samuel Butler and the meaning of chiasmus. Springer, 1986.
[23]Heath, David M. Chiastic structures in Hebrews:

with a focus on 1: 7-14 and 12: 26-29. Neotestamentica, 2012, 46(1), p. 61-82.
[24]Thomas, John C. The literary structure of 1 John. Novum Testamentum, 1998, 40(Fasc. 4), p.369-381.
[25]Bligh, John. Galatians: a discussion of St Paul's epistle. Householder commentaries, 1969.
[26]村井源．“ガラテヤの信徒への手紙の修辞構造 テキスト全体での集中構造（コンチェントリック）と交差配列（キアスムス）”．聖書の修辞構造．http://bible.literarystructure.info/bible/48_Galatians_1.html#1-1，（参照 2023-3-31）．

**Abstract**

In this paper, it was examined whether the Epistle to the Galatians, which is a book contained in the New Testament, has a reversal structure or not. Assuming the well-known structural chiasmus in this text, the Bligh diagram, we determined whether the pairs of elements that make up this diagram are in contrasting relationships. As a result of our analysis, it became clear that all pairs of elements that make up this diagram are in contrasting relationships, so it was concluded that the text has a reversal structure.

（受付日：2023 年 6 月 8 日，受理日：2023 年 10 月 31 日）

**大喜多　紀明（おおぎた　のりあき）**

東京工業大学大学院総合理工学研究科修士課程修了．
専門は文化人類学，民俗学．
主な論文：大喜多紀明．アイヌの子守歌（イヨンルイカ）についての考察：心性が継承される直接的なプロセス．京都民俗．2013, (30/31), p. 143-158.